# 日本語配慮表現データベース構築プロジェクト報告(4)

## —2021 年度の活動報告—

山岡政紀（創価大学）

**要　旨**

2018 年度より採択を受けた科研費基盤研究（B）研究課題「日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築」の研究期間の 4 年目に当たる 2021 年度に行った諸活動について報告する。具体的活動の報告として、2021 年 8 月に本研究課題の検討会として開催した第 13 回日本語コミュニケーション研究会の内容（第 3 節）、広報活動と意見聴取を目的として行った 2021 年 6 月の国際語用論学会でのパネル“Contrastive Study for Considerate Expressions”の内容（第 4 節）、2021 年 12 月に日本語用論学会第 24 回大会でのワークショップ「配慮表現の対照研究」の内容（第 5 節）、データベース入力作業の内容（第 6 節）などについて報告する。

**キーワード**：配慮表現、データベース、ポライトネス、慣習化、対照研究

### 1. はじめに

2018 年度 4 月に採択を受けた科学研究費補助金基盤研究（B）研究課題「日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築」は、2021 年度に 4 年間の研究期間の最終年度となる 4 年目を迎えた。これまでの研究活動については本報告の前回までにて随時行ってきたのでここでは省略する。

2021 年度は 2020 年度に惹起した新型コロナウィルス感染症の拡大が依然として終息することなく、2 年間が過ぎようとしている。毎年 8 月の研究合宿も 2 年連続でオンラインでの開催を余儀なくされた。本年は 6 月に国際語用論学会（IPrA）第 17 回大会でのパネル、12 月に日本語用論学会（PSJ）第 24 回大会のワークショップと 2 度の学会発表を行ったが、いずれもオンライン開催での発表となった。国際語用論学会は当初、スイスのヴィンタートゥールで開催される予定だったが、渡航しなくても参加し、発表することができたのはオンラインというツールの利便性を物語るものでもあった。これらにより、研究の質的向上という側面において研究計画は遅滞なく進んだと言えるが、データベース入力内容の具体的検討についてはオンラインで行うことには限界があり、若干の遅滞があることを認めざるを得ない。現在のところ、研究期間の延長、および研究経費の年度繰り越しを申請する方向で調整している。

なお、本プロジェクト報告(4)は「日本語コミュニケーション研究会」の会誌「日本語コミュニケーション研究論集」第 11 号に収録されている。この論集は、本研究課題の研究代表者（本稿の筆者。以下同じ）並びに基盤研究（C）研究課題「日本語学習者のポライトネスに関わる言語運用についての基礎的研究」（研究代表者：牧原功氏）、基盤研究（B）「CEFR の文脈化と日本語・日本語教育への応用」（研究代表者：小野正樹氏）の 3 科研費研究課題の合同研究会の会誌であり、3 課題合同の科研費報告書を兼ねるものである。

## 2. 本研究課題の概要

本研究課題の概要は以下の通りである。

研究課題:日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築

研究課題（英文）: The Database Construction of Correct Use and Misuse in Considerate Expressions for the Dictionary of Japanese Considerate Expressions

研究期間：2018 年～2021 年（4 年間）

研究種目：基盤研究（B）

研究課題/領域番号：18H00680

研究経費配分額：9,750 千円　（直接経費 ：7,500 千円、間接経費 ：2,250 千円）

研究経費 2018 年度: 2,860 千円　（直接経費 ：2,200 千円、間接経費 ：660 千円）

研究経費 2019 年度: 2,080 千円　（直接経費 ：1,600 千円、間接経費 ：480 千円）

研究経費 2020 年度: 2,080 千円　（直接経費: 1,600 千円、間接経費: 480 千円）

研究経費 2021 年度: 2,730 千円　（直接経費: 2,100 千円、間接経費: 630 千円）

キーワード：配慮表現 / 敬意表現 / ポライトネス / 慣習化

研究代表者：山岡政紀（創価大学）

研究分担者：牧原功（群馬大学）、小野正樹（筑波大学）、三宅和子（東洋大学）、甲田直美（東北大学）、西田光一（山口県立大学）、斉藤信浩（九州大学）、大和啓子（群馬大学）、伊藤秀明（筑波大学）、斉藤幸一（大阪電気通信大学）、遠藤李華（創価大学）、宮原千咲（広島修道大学）、李丹（創価大学）以上 12 名

研究協力者（国内）: 野田尚史（国立国語研究所）、徳井厚子（信州大学）、大塚望（創価大学）、塩田雄大（NHK 放送文化研究所）、池上達昭（くろしお出版）、大堀裕美（東北大学）、孫守乾（東京都立大学大学院）以上 7 名

研究協力者（海外）: 李奇楠（中国・北京大学）、陳臻渝（中国・華僑大学）、金玉任（韓国・誠信女子大学）、カノックワン・ラオハブラナキット片桐（タイ・チュラロンコン大学）、リナ・アリ（エジプト・カイロ大学）、岩崎透（インドネシア・国際交流基金）、ウマロヴァ・ムノジャット（ウズベキスタン世界言語大学）、市川真未（米国・ジョージワシントン大学）、以上 8 名

## 3. 2021 年度研究会の開催

### 3.1 第 13 回研究会の概要

2021 年 8 月 26 日（木）、27 日（金）の二日間にわたり、第 13 回日本語コミュニケーション研究会を Zoom オンラインにて開催した。以下、研究会の概要について報告する。

この研究会は研究代表者山岡と研究分担者牧原功氏、同小野正樹氏の三者がそれぞれの科研費研究課題を持ち寄って行う合同研究会として 2011 年 2 月に第 1 回以来、毎年開催し、今回は第 13 回を迎えることとなった。主に 26 日は山岡を研究代表者とする研究課題

「日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築」に関連する研究発表、主に 27 日は牧原功氏・小野正樹氏を研究代表者とするそれぞれの研究課題に関連する発表に分けて行う方向で発表募集を行ったが、発表者の都合により、実際には両日とも 3 課題に関連する研究発表が混在することとなった。

二日間を通じて、本研究課題の研究代表者 1 名、研究分担者 11 名、研究協力者 10 名、小野正樹氏の研究課題のみの研究分担者・研究協力者 8 名の合計 30 名が参加した。

今回も科研費で取得した Zoom アカウントを使用して開催した。参加者は遠隔地におよび、国内では甲田直美氏（仙台・東北大学）から斉藤信浩氏（福岡・九州大学）まで、海外からは、李奇楠氏（中国・北京大学）、金玉任氏（韓国・誠信女子大学）、リナ・アリ氏（エジプト・カイロ大学）、二ノ宮崇司氏（カザフスタン・アルファラビ・カザフ国立大学）が現地からリモート参加して発表を行った。発表者以外では市川真未氏（米国・ジョージワシントン大学）がリモート参加している。時差もほとんど感じることなく、音声・画像とも良好であった。非常にグローバルな研究会となったと言える。以下に、研究会のプログラムを掲示する。うち、時間帯のあとに☆印のあるものが本研究課題関連の発表である。

8 月 26 日（木）午前：第 1 セッション

①10:10 - 10:40☆　斉藤幸一（大阪電気通信大学）・嶋田みのり（東北学院大学）・宮原千咲（広島修道大学）　助言における配慮表現

②10:45 - 11:15　Vanbaelen Ruth（筑波大学）　オンライン授業に関するアンケート結果：3 学期分の比較

③11:20 - 11:50☆　斉藤信浩（九州大学）　時間的近接性を表す従属節のソバカラについて

8 月 26 日（木）午前：第 2 セッション

④13:00 - 13:30☆　山岡政紀（創価大学）〔基調報告〕配慮表現データベースの現状と将来構想

⑤13:35 - 14:05☆　牧原　功（群馬大学）話題転換とポライトネス

⑥14:10 - 14:40☆　大和啓子（群馬大学）補助動詞「～ておく」の諸用法

8 月 26 日（木）午前：第 3 セッション

⑦14:55 - 15:25☆　宮原千咲（広島修道大学）確認場面における配慮表現

⑧15:30 - 16:00☆　李　丹（創価大学）　日本語の配慮表現とその中国語訳からわかること

⑨16:05 - 16:35☆　西田光一（山口県立大学）　英語の定型表現の談話機能と語用論の範囲の限定

8 月 27 日（金）午前：第 4 セッション

⑩10:40 - 11:10　チョーハン アヌブティ（筑波大学）日本語とヒンディー語における自他表現―量的研究の観点から―

⑪11:15 - 11:45　二ノ宮崇司（アルファラビ・カザフ国立大学）日本語における禁止の注意：日本語母語話者データとカザフスタン国籍を有する日本語学習者

データの対照分析

8 月 27 日（金）午前：第 5 セッション

⑫13:00 - 13:30　小野正樹（筑波大学）CEFR の文脈化と日本語・日本語教育研究への応用構想

⑬13:35 - 14:05　朱炫姝（目白大学）・日暮康晴（筑波大学大学院）・山下悠貴乃（十文字学園女子大学）・伊藤秀明（筑波大学）・小野正樹（筑波大学）「日本語らしさ」「わかりやすさ」の度合いが決まる要素について

⑭14:10 - 14:40　LE THI THU HA（筑波大学）日本語学習者による条件接続辞の使用実態 －I-JAS のストリーテリングのデータの分析から―

8 月 27 日（金）午前：第 6 セッション

⑮14:55 - 15:25☆　中後幸恵（創価大学大学院）補足の接続詞における配慮の考察 ―「ただ」を中心に―

⑯15:30 - 16:00☆　金　玉任（誠信女子大学）　前置き的に用いられる「ね」

⑰16:05 - 16:35☆　李　奇楠（北京大学）　を格構文の日中対照

### 3.2 基調報告：配慮表現データベースの現状と将来構想

前節で報告した研究会の④基調報告について概略を報告する。内容は以下の通りである。

１．科研費研究計画の概要
２．科研費研究計画の構成メンバー
３．過去 3 年間の研究計画遂行状況
４．データベース入力の経過と現況
５．配慮表現データベースの構造：最新版
７．ポスト科研費に向けて
８．外国語への対訳の考え方

このうち、1、2 については第 2 節に記載した通りである。3 については本報告では省略する。4～8 については第 4 節以降で詳しく報告する。

## 4.　学会発表の報告

### 4.1 国際語用論学会でのパネル

国際語用論学会（International Pragmatics Association, 以下、IPrA）の第 17 回大会が 2021 年 6 月 27 日から 7 月 2 日までの日程でオンライン開催された。当初、スイス・ヴィンタートゥール（Winterthur, Switzerland）のチューリッヒ工科大学にて開催される予定であったが、新型コロナウィルス感染症の状況が十分には好転しなかったため、オンライン開催となった。パネルのエントリーは 1 年前の 2020 年 6 月に行い、7 月初旬に採択通知を受けていたので、準備期間が約 1 年間あったことになる。

本研究課題の研究グループによるパネル” Contrastive Study on Considerate Expressions”は

6 月 29 日（火）に開催された。パネル主催者は研究代表者と研究分担者・甲田直美氏。パネル発表を行ったのは研究代表者と研究分担者 3 名（牧原功氏、小野正樹氏、西田光一氏）研究協力者（李奇楠氏、リナ・アリ氏）2 名の合計 6 名である。甲田氏によるイントロダクションに続き、5 本の発表を行った後、質疑応答を行った。時間は 90 分間であった。

---

Panel: Contrastive Study for Considerate Expressions

Organizer: YAMAOKA Masaki, KODA Naomi

Presenters: YAMAOKA Masaki, KODA Naomi, MAKIHARA Tsutomu, ONO Masaki, NISHIDA Koichi, LI Qinan, Lina ALI

Panel Introduction: The Overview of this Panel (KODA)

Presentation 1: How Universal are Considerate Expressions? (YAMAOKA)

Presentation 2: On the Considerate Expressions in Japanese. (MAKIHARA, ONO)

Presentation 3: On the Considerate Expressions in English. (NISHIDA)

Presentation 4: On the Considerate Expressions in Chinese. (LI)

Presentation 5: On the Considerate Expressions in Arabic. (ALI)

---

研究代表者による発表 1 “How Universal are Considerate Expressions?” では、まず配慮表現（considerate expressions）という範疇の定着を図るべく、以下のような説明を行った。

<u>What is “Considerate Expressions”?</u>

In the current research of Japanese linguistics, our interests in a category called “considerate expressions” are increasing. This topic is closely related to politeness. As is well known, politeness is a context-dependent interpersonal regulative act that is not inherently fixed to specific linguistic forms. In Japanese linguistics, however, it has been pointed out that specific words and phrases seem to perform politeness function as a second or third sense of the words or phrases.

An example of considerate expressions is a phrase “tsumaranai-mono-desu-ga…” (＝This item is a low value..., but I give you it.). It is a well-known address when giving a gift, and a kind of negative politeness to avoid giving some psychological burden to the recipient. Japanese people have many opportunities giving some gifts to their relatives or benefactors. While they frequently use negative politeness expression, this phrase might be conventionalized.

We have decided the definition of considerate expressions as below:

> Considerate expressions are linguistic expressions that have been conventionalized to such an extent that they are used in interpersonal communication for maintaining as good a relationship as possible with other people. （Yamaoka(2015) , Yamaoka (ed.) (2019: 38)）

To put simply, we can paraphrase it as conventionalized politeness expressions.

これに続き、配慮表現を形成する慣習化（conventionalization）現象について、日本語の副詞「ちょっと」が原義の低程度の意義を喪失し、フェイス侵害の緩和機能に特化していくプロセスについて論じた。

さらに通言語的な配慮表現の慣習化現象として、英語における能力を問う疑問表現（can you~?）が依頼表現として慣習化していくプロセスについて論じた。これとほぼ同じ現象が中国語にも見られる（能不能(Néng bùnéng)～?”）ことに言及し、配慮表現の普遍性の例示とした。そのほか忠告の際に FTA を緩和するヘッジを添えることなど、いくつかの通言語的な配慮表現の慣習化現象について述べた。つづいて各発表者より日本語、英語、中国語、アラビア語の順に各言語における配慮表現に個別現象を取り上げて発表を行った。

パネルの参加者は約 20 名で、質疑応答においても、配慮表現の解釈の幅と文脈依存性に関する質問、慣習化現象が起きる要因に関する質問などがあり、参加者のグローバルな関心の高さを実感するパネルとなった。

### 4.2 日本語用論学会第 24 回大会でのワークショップ

日本語用論学会（PSJ）第 24 回大会（2021 年 12 月 18・19 日）は当初、研究代表者・甲田直美氏を実行委員長として東北大学にて開催される予定であったが、新型コロナウィルス感染症の状況が十分に好転していないとの判断から、2 年連続でオンライン開催されることとなった。本研究課題の中心者で、PSJ 第 23 回大会ワークショップ（2020 年 11 月）、IPrA パネル（2021 年 6 月）と 2 度の共同発表を実行してきた「配慮表現の対照研究グループ」で、3 度めの共同発表を行うこととして発表申し込みを行い、無事に採択を得た。

これまでの 2 度の共同発表では共同発表では、各個別言語における配慮表現についてそれぞれ報告する形を取ったが、今回は具体的なテーマ別に複数言語を対照させるスタイルを取ることにした。持ち時間は 100 分間。内容は以下の通りである。

---

ワークショップ：配慮表現の普遍性と個別性をめぐって

オーガナイザー　山岡政紀（創価大学）

発表者：山岡政紀、牧原功、小野正樹、甲田直美、李奇楠、リナ・アリ

発表①配慮表現に関わるテンスの日英対照　牧原功（群馬大学）・西田光一（山口県立大学）

発表②禁止表現における背景化の多言語対照　小野正樹（筑波大学）・西田光一（山口県立大学）・リナ・アリ（カイロ大学）

発表③マイナス評価の配慮表現に関する日中対照　李奇楠（北京大学）・山岡政紀（創価大学）

発表④副詞による賛同表現の日英対照　山岡政紀（創価大学）・甲田直美（東北大学）・西田光一（山口県立大学）

コメント①　甲田直美（東北大学）

コメント②　西田光一（山口県立大学）

フロアからの質疑応答

---

本ワークショップの趣旨について改めて整理をしておきたい。

ポライトネス機能が慣習化したものが配慮表現であることはこれまでもたびたび論じてきて学界の共通認識となりつつある。もともとポライトネス理論は個別言語を超えた普

遍的言語現象として説明されていたが、同様に慣習化もまた、個別言語に依存する現象ではなく普遍的に見られる現象と考えられる。したがって、配慮表現はどの個別言語にも通言語的に見られる普遍的現象であるはずである。

次に、個々の具体的な配慮表現に視点を移して見ると、2 種に大別できる。

①個別言語を超えて普遍的に見られる配慮表現

②ある個別言語において特有の配慮表現

どのような文脈が頻出して慣習化しやすいか、また、どのような表現が慣習化するかが個別言語の事情によって差異があると考えるのは自然なことであり、②のように配慮表現は個別言語ごとに形成されると考えるべきである。そのうえで、《依頼》が相手にかける負担をどうやって緩和するかといった文脈で発生するポライトネス現象は、個別言語を超えて普遍的なものであるから、①のような通言語的な配慮表現が観察できると考えられる。

前回の日本語用論学会第 23 回大会のワークショップ「配慮表現の対照研究」での見解を整理すると、ⅰ、ⅱは日本語、英語、中国語に共通して見られる通言語的配慮表現であり、ⅲは日本語特有、ⅳは英語特有の配慮表現である。

ⅰ《忠告》を緩和するヘッジ（ようだ, It might be better to-, 等）⇒通言語的

ⅱ《依頼》に使用される副詞（ちょっと、稍、一下）⇒通言語的

ⅲ《提供》に使用される「つまらないものですが」⇒【日本語特有】

ⅳ《依頼》に使用される”I forgot to 不定詞”⇒【英語特有】

ⅰ、ⅱにしてもすべての言語に通言語的に見られると証明されているわけではないし、逆にⅲは「つまらない」という語彙の選択が特殊ではあるものの、提供の際に”a little token”（英）や「小意思」（中）のような謙遜表現は通言語的に見られるので、通言語的なものと個別言語特有のものがきっぱりと二つに分かれるわけではないことがわかる。

こうした問題意識のもとに 4 件の発表を通じて言語間の配慮表現の共通性と相違とを丁寧に記述する作業を行った。このワークショップには 57 名が参加した。質疑応答も活発に行われ、今後の配慮表現研究の進展を期する有意義なワークショップとなった。

## 5. データベース入力の進捗状況

### 5.1 データベースの構造の最新版

配慮表現データベースの構造については入力作業と共に常に改善を図っている。8 月の第 13 回日本語コミュニケーション研究会の研究代表者による基調報告の際に、最新のデータベースの構造として以下を報告し、意見交換した。

①＜配慮表現＞☆　配慮の表現形式・語彙
　＜配慮表現よみ＞☆
　＜バリエーション＞☆

②＜形式分類＞☆（副詞・副詞句、形容詞類、接尾語・補助動詞、文末表現、慣用文、文法形式の交替）

③＜機能分類＞☆（利益表現、負担表現、緩和表現等）

④＜原義＞☆　文脈や対人的機能を捨象した辞書的意味。本来の意味・用法。

⑤＜配慮機能＞☆　当該配慮表現が発話において果たす効力。その記述に当たってはLeech や B&L のポライトネス理論を積極的に活用する。使用・不使用テストなどの文法テストのほか、必要に応じてアンケート、インタビュー調査を行う。

⑥＜文脈・発話機能＞☆配慮表現が使用される当該発話、及びその文脈となる先行発話の発話機能＝発話の目的⇒配慮表現の使用目的

⑦＜表現文型＞☆＝学習者用表現文型（典型的作例）
小項目として【文型】【説明】を用いる。

⑧＜正用例＞＝会話コーパスから取得した正用例。主に対人機能が明確な話し言葉コーパスから実例を収集（原則として３例以上）※⑦＜表現文型＞の使用頻度を保証するものとして対応する実例を登載すること

⑨＜正用例の説明＞＝⑧に対する補助項目　説明が必要な場合、用例番号を用いて説明を添える。⑦＜表現文型＞と⑧＜正用例＞との対応関係を示す場合もここに記す。※⑧は正用例のみを記載。⇒新設項目

⑩＜誤用文型＞△作例による誤用文型。文脈と合致しない不適切な使用に注意が必要な場合など。【文型】【説明】の小項目を使用する。⇒辞典収録の可能性あり⇒新設項目　※⑩は対応する⑪＜誤用例＞の実例がなくても掲載してよいとする。

⑪＜誤用例＞＝学習者コーパスから取得した誤用例。任意項目とする。

⑫＜考察＞△以上の各項目を総合的に統括する考察

⑬＜外国語への対訳＞△　英、中、韓、タイ、アラビア語
⇒当面、空欄でよい。アイデアがあれば記載してもよい。

⑭＜参考文献＞☆　先行研究の文献名

⑮＜記載者／日付＞記載者氏名と記載日の日付（yyyymmdd）加筆修正のたびに追加記載

このうち、☆印の付いた項目を構想中の『日本語配慮表現辞典』に登載する。△は辞典への登載を個々に取捨選択すべき項目である。

以下、前年度から変更した箇所について説明を行う。

第一に、⑨＜正用例の説明＞という項目を立てた。⑧＜正用例＞にはコーパスから取得した用例を収録しているが、配慮表現専用の語彙・語句は存在せず、当該語彙・語句の原義用法の用例と、原義が希薄化あるいは捨象された配慮表現用法の用例とが形式上は区別できないため、なぜ当該の用例が配慮表現としての用例であるかについて説明を要する場合が多い。そのため、従来の入力例のなかには⑧＜正用例＞の項目に説明を書き添えている例が少なくなかった。しかし、項目ごとにデータ型を揃えるため、⑧＜正用例＞はコーパスからの転載に限定したく、⑨＜正用例の説明＞を別項目として立てることにした。

また、⑧＜正用例＞には⑦＜表現文型＞の使用頻度を保証するものとして対応する実例を登載すること、という条件をつけている。そのことの保証を確認するため、⑦＜表現文型＞の文型番号と⑧＜正用例＞の用例番号の対応関係を記述する際、この⑨＜正用例の説

明＞に記載するものとする。

第二に、⑩＜誤用文型＞という項目を立てた。ここには、作例による誤用文型を記載する。作例による点は⑦＜表現文型＞と同じである。したがって、⑦＜表現文型＞と同じく【文型】【説明】の小項目を使用する。本研究課題の研究分担者・伊藤秀明氏は 2019 年 8 月の夏合宿で「学習者の配慮表現誤用例収集における課題―学習者コーパスの分析から」と題する研究発表を行い、学習者コーパスに配慮表現の誤用は現れにくいことを主張した。学習者は未収得の配慮表現をそもそも使用しないためである。むしろ学習者の配慮表現の誤用は、配慮表現を用いるべき文脈で用いなかったり、誤った形式で用いたりなど、配慮表現の形式から逸脱したものが想定されるため、コーパスからの検索は難しい。そうした誤用例はむしろ日本語教育に携わる研究者が経験に基づいて作例を行うのが適切であると考え、本項目を設けた。この項目は学習者にとって有益な場合が想定されるので、必須項目ではない任意項目ではあるが、『日本語配慮表現辞典』の収録可能性のある対象項目とする。これにより、⑪＜誤用例＞とは別項目とする。⑪＜誤用例＞はもともと任意項目としており、対応する実例がなくても⑩＜誤用文型＞は記載してよいものとする。

### 5.2 入力マニュアル

5.1 のデータベースの構造を踏まえて、入力マニュアルを以下の通り更新した。

①＜配慮表現＞☆　配慮の表現形式・語彙

＜配慮表現よみ＞☆　配慮表現のひらがな表記

＜バリエーション＞☆　同様の配慮機能を持つ異形態や類義語への部分的交替　交替する部分を抽出し、⇒で示す。二つ以上の交替形式がある場合は／で併記する。

（例）＜配慮表現＞滅相もない　＜バリエーション＞ない⇒ありません／ございません

②＜形式分類＞☆（副詞、副詞句、形容詞・形容詞句、接尾語・補助動詞、文末表現：助動詞／終助詞／思考動詞／二重否定／言いさし／条件情意、慣用文、文法形式の交替）の７分類のいずれかを選択してください。

※形容詞・形容詞句、接尾語・補助動詞はそれぞれ１分類とします。

※文末表現を選択した場合は、：の右に下位分類を一つ選択してください。

※どの分類に該当するか不明な場合、新しい範疇が必要と思われる場合は研究代表者に問い合わせてください。

③＜機能分類＞☆（利益表現：自利大／自利大（感謝）／他利小、負担表現：他負大／他負大（謝罪）／自負小、緩和表現：侵害抑制／不一致回避、賞賛表現、謙遜表現：自賛抑制／自己非難、賛同表現、共感表現）の７分類のいずれかを選択してください。

※下位分類があるものは、：の右に下位分類を一つ選択してください。

※どの分類に該当するか不明な場合、新しい範疇が必要と思われる場合は研究代表者に問い合わせてください。

④＜原義＞☆　文脈や対人的機能を捨象した辞書的意味。本来の意味・用法。辞書から該当箇所を引用する場合は当該辞書名も記載してください。

⑤＜配慮機能＞☆　当該配慮表現が発話において果たす効力。要するに配慮表現としての意味。その記述に当たっては Leech や B&L のポライトネス理論を積極的に活用してくださ

い。必要に応じて、使用・不使用テストなどの文法テストのほか、アンケート、インタビューによる意識調査を行ってください。
⑥＜文脈・発話機能＞☆　当該配慮表現が使用される（使用されやすい）文脈を記述し、（先行発話と）当該発話の発話機能を記述してください。
⑦＜表現文型＞☆＝学習者用表現文型　日本語学習者にわかりやすい典型的用例を作例して【文型】としてください。その際、必要に応じて文脈等を明示した【説明】を添えてください。【説明】は日本語学習者にもわかるような平易な言葉で記してください。【文型】に用いる作例には丁寧体（ですます）、【説明】には普通体（である）を使ってください。複数の文型を提示する必要がある場合は、【文型１】【説明１】、【文型２】【説明２】と番号を添えてください。会話の話者は A、B で表示してください。
⑧＜正用例＞＝会話コーパスから取得した正用の実例　主に対人機能が明確な話し言葉コーパス、シナリオコーパス、小説中の会話文などから実例を収集して転記してください。原則として３例以上、上限は設けません。その際、出典をかっこ書きで添えてください。
※原義ではなく配慮表現としての用例であることを必ず確認してください。
※表現文型の使用頻度を保証するものとして対応する実例を⑧に登載し、その対応関係は⑨に記載してください。
⑨＜正用例の説明＞　説明が必要な場合、用例番号を用いて説明を添える。⑦＜表現文型＞と⑧＜正用例＞との対応関係を示す場合もここに記してください。
⑩＜誤用文型＞△＝作例による誤用文型。文脈と合致しない不適切な使用に注意が必要な場合など。
※⑩は対応する誤用例の実例がなくても掲載してよいとする。
⑪＜誤用例＞＝学習者コーパスから取得した誤用例（任意項目）配慮表現の機能を誤解したような誤用例があれば転記してください。その際、出典をかっこ書きで添えてください。
⑫＜考察＞△①～⑦を総合的に統括する考察（200～800 字）　当該配慮表現について論文等を作成されたことがあればその要旨を記載してください。新たに書き下ろしてもかまいません。考察中に用例を用いる場合はなるべく⑦の【文型】を用いる（指す）ようにしてください。
⑬＜外国語への対訳＞△　英、中、韓、ﾀｲ、ｱﾗﾋﾞｱ語　専門の担当者があとで記載しますので当面は記載しなくてもかまいません。（アイデアがある場合は記載してもかまいません）
⑭＜参考文献＞△　先行研究の文献名　論文末の参考文献一覧と同じ様式
⑮＜記載者／日付＞記載者氏名と記載日の日付（yyyymmdd）
☆の項目を『日本語配慮表現辞典』に登載します。△は内容を精査のうえ、取捨選択して登載します。
※いくつかサンプルを添付しますので、参考にしてください。ファイル名も同様です。
※正用例、誤用例はあくまでも研究用資料としてデータベースに入力しますが、著作権や辞典の紙幅の関係で、辞典にはそのまま登載しません。学習者にもわかりやすい実例があった場合は、表現文型の方に活用してください。
※一つの配慮表現を意味・機能によって二つ以上のブランチに分ける場合、別項目のファイルに分けてください。ファイル名は番号で区別してください。例　なんか①、なんか②

## 6. 2022 年度以降の本プロジェクトの構想について

本年 2021 年度は科研費研究期間最終年度となる 4 年目を迎えている。この 4 年間で配慮表現研究はさまざまな角度から議論検討が進み、質的にも量的にも大いに向上した。

本研究課題の研究期間終了後となる 2022 年度以降のポスト科研費をどうするかについて、共同研究者とも議論を重ねてきた。これについて以下に述べる。

第一に、『日本語配慮表現辞典』の出版企画を改めて策定して正式に稼働させたいと考えている。研究協力者であるくろしお出版・池上達昭氏を通じて同社より出版企画に対する内諾を得ている。今後、具体的な出版企画の承認手続きに入りたい。これには本研究課題の研究チームをそのまま「日本語配慮表現辞典執筆チーム」として継続していきたいと考えている。『日本語配慮表現辞典』の当面の出版目標を 2026 年度と設定している。

第二に、本研究課題で作成したデータベースを『日本語配慮表現辞典』のコンテンツとして移行可能なものにするためのデータ整理と確認作業が必要である。当初、この作業を関係者が一堂に会して集中的に実施することを 2021 年 12 月の語用論学会の前後に計画していたが、学会がオンライン開催となったため実現できなかった。このことを踏まえて本研究課題の期間を 2022 年度まで延長したく、本稿執筆と並行して申請中である。また、これに伴い、データベース入力システムを本格稼働も 2022 年度以降に延期している。

第三に、本研究課題の期間延長申請とは別に、科研費基盤研究(B)の新研究課題を申請中である。本研究課題の研究分担者・協力者の多くに継続の依頼をして快諾をいただいた。採否が不確定のため、ここでは詳細を述べないが、申請した新研究課題名は「多言語配慮表現データベースの構築と配慮表現辞典の編纂」である。採択数の少ない基盤研究(B)に再度申請しているため、採択は決して容易ではないが、仮に 2022 年度が不採択となっても、その期間を準備期間と捉え直して次年度に捲土重来を期したいと考えている。

第四に、論文集『配慮表現の対照研究』（仮称）の出版である。日本語用論学会第 23 回大会（2020）では「配慮表現の対照研究」、第 24 回大会（2021）では「配慮表現の普遍性と個別性をめぐって」と題するワークショップを行った。日本語だけでなく諸言語の配慮表現に視野を拡げたワークショップには、多くの研究者より関心が寄せられた。『配慮表現辞典』も通言語的視点から展開していくことがより有益で実りある研究となると考え、この研究成果を論文集としてまとめて 2023 年度に発刊したいと考えている。

## 7. 『日本語コミュニケーション研究論集』第 11 号の刊行

研究代表者が牧原功氏、小野正樹氏と共に科研費研究課題の合同研究会として開催してきた「日本語コミュニケーション研究会」が毎年発行している「日本語コミュニケーション研究論集」は三者の科研費報告書を兼ねている。本稿は研究論集第 11 号に収録する予定のものである。本研究論集は奇数号を筑波大学（責任者・小野正樹氏）、偶数号を創価大学（責任者・山岡政紀）が担当することとなっており、今号第 11 号は筑波大学の担当である。

前号第 10 号にも本研究グループ諸氏による配慮表現研究の成果が多く収められているので、論文名を巻末の参考文献に掲載する。今号第 11 号にも同様に多くの研究成果が掲載

される予定であるが、同時出稿のため、論文名等の紹介は省略する。

**謝辞**

本稿は科学研究費補助金基盤研究(B)研究課題「日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築」（課題番号 18H00680、2018-21 年度、研究代表者山岡政紀）の助成を受けた研究成果の報告であることを申し述べ、謝意を表します。

**参考文献**

大堀裕美（2021）「日本語の二重否定モダリティ―二重否定の型と発話機能の事例から―」『日本語コミュニケーション研究論集』第 10 号, 52-63, 日本語コミュニケーション研究会.

甲田直美（2021）「後回しの配慮―注釈の談話標識「ただ」「実は」―」『日本語コミュニケーション研究論集』第 10 号, 25-34, 同.

牧原功（2021）「日本語の挨拶表現とポライトネス――「こんにちは」について――」『日本語コミュニケーション研究論集』第 10 号, 14-24, 同.

山岡政紀（2015）「慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義」『日本語用論学会第 17 回大会発表論文集』第 10 号, 315-318, 日本語用論学会.

山岡政紀（2016）「配慮表現の慣習化と原義の喪失をめぐる一考察」『日本語コミュニケーション研究論集』第 5 号, 1-9, 同.

山岡政紀（2018）「日本語配慮表現の分類と語彙リスト」『日本語コミュニケーション研究論集』第 7 号, 3-11, 同.

山岡政紀（2019）「日本語配慮表現データベース構築プロジェクト報告(1)――研究計画と 2018 年度の活動報告――」『日本語コミュニケーション研究論集』第 8 号, 1-14, 同.

山岡政紀（2020）「日本語配慮表現データベース構築プロジェクト報告(2)――研究計画と 2019 年度の活動報告――」『日本語コミュニケーション研究論集』第 9 号, 74-89, 同.

山岡政紀（2021）「日本語配慮表現データベース構築プロジェクト報告(3)――研究計画と 2020 年度の活動報告――」『日本語コミュニケーション研究論集』第 10 号, 1-13, 同.

山岡政紀編（2019）『日本語配慮表現の原理と諸相』くろしお出版.

山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現』明治書院.

山岡政紀・牧原功・小野正樹（2018）『新版・日本語語用論入門』明治書院.

大和啓子（2021）「丁寧体で用いられる「てしまう」縮約形「ちゃう」の配慮機能」『日本語コミュニケーション研究論集』第 10 号, 35-41, 同.

李奇楠（2021）「接辞の用法とポライトネス」『日本語コミュニケーション研究論集』第 10 号, 42-51, 同.

李丹（2021）「副詞「たしかに」の慣習化にみる未実現事態への危惧」『日本語コミュニケーション研究論集』第 10 号, 64-71, 同.

Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge University Press.

Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics,* London: Longman.

Leech, G. (2014) *The Pragmatics of Politeness*, Oxford University Press.

Yamaoka, Masaki (2021) “Construction of a database for the correct and incorrect use of considerate expressions, for the formation of a Japanese considerate expression dictionary”, *Impact: Critical Thinking in Social Sciences*, Vol.2021, No.2, 62-64, Sciences Impact.

（山岡政紀、創価大学文学部教授、myamaoka@soka.ac.jp）